

大道安次郎博士の人と業績

倉 田 和 四 生

はじめに

- [1] 敦賀から関西学院へ
- [2] 学生時代
- [3] 果された役割
 - (1) 高等商業学部教授 (2) 法文・文学部時代
 - (3) 社会学部時代 (4) 定年退職後
- [4] 研究分野と業績
 - (1) スミス経済学の研究 (2) アメリカ社会学史
 - (3) 日本社会学史 (4) 老人・病院社会学
 - (5) 都市の社会学的研究
- [5] お人柄——出会った人々との交わり
むすび

献 辞

関西学院大学文学部社会学科の主任教授として昭和35年の社会学部創設に尽力し、自から初代の学部長に就任されて学部運営の基礎固めをなさった大道安次郎先生が1月11日、急性心不全のため急逝された。

先生は昭和5年に母校関西学院高等商業学部に入職以来、法文学部、文学部、社会学部に通算42年間在職し、その間に「スミス経済学」、「アメリカ社会学史」、「日本社会学史」、「老人・病院社会学」、「都市社会学」などの広い分野で数多くの優れた業績を残された。昭和47年に定年退職されて名誉教授となられた後も益々活発に研究活動を続けられ、八十路を越えてなお研究著述に専念されていた。

亡くなられる前日の10日もお元気で入院中の奥様の御世話をされ、またその日筆者が依頼していた委員会の報告書にも署名して下さっていただけ

に、その夜おやすみのまま不帰の客になろうとは思ってもかけない事であり、言いようのない悲しみであった。改めて師の深い学恩に感謝したい。

はじめに

筆者はかねて関西学院における社会学の歩みについて書きとめてみたいと思い、前に社会学部の始業講演で話したことなどをもとに、まず社会学科の創設期の頃のことから始め、その後で文学部社会学科時代、社会学部創設について書く心づもりをしていたが、雑事にとりまぎれて放置したままに成っていた。いま大道安次郎先生の突然の逝去にあたって、先の順序とは逆に成るが、まず大道先生について一文をまとめてみることにしたいと考えている。

関西学院の高等学部の文科に社会学科が設置されたのは大正4年(1915)のことである。これは日本の高等教育機関に社会学科が設けられたものとしては最も古いものに属するものと思われる。当時、法学や経済学に比べて「社会学」はなじみの薄い学問であり、また社会主義と混同される時代であったから、社会学科より、法律科、法政科、経済科にした方が良いという意見も出されたが、学科設立の際に中心的な役割を果たした小山東助教授は、関西学院はキリスト教を建学の精神とする学校であるから、虐げられた者に愛の手をさしのべる仕事、すなわち社会に奉仕する人物(ソーシャル・ワーカー)を養成するため、総合的社会理論を把握することを目指す学科を作りたいということ強く主張され、社会学科とすることが決定されたといわれている。¹⁾

1) 関西学院文学部『文学部回顧』昭和6年 9-10頁。

余田博通「記念論文集発刊に際して」『関西学院社会学部紀要』9・10号 昭和39年 1-8頁。

藤原 恵「関西学院史に見る新聞教育」『関西学院社会学部紀要』29号 昭和49年12月 3-16頁。

このように当時としては珍しい名称をもった関西学院の社会学科には最初の数年は希望者がなかったが、大正7年に河上丈太郎教授が就任して社会学科の面倒を見ることに成った年から志望者が増えて来たので、社会学の専門の講師が必要となり、翌8年と9年には社会学者として広島高等師範学校に着任されたばかりの高田保馬博士に集中講義に来てもらい急場をしのいでいる²⁾。

つづいて大正10年にはベーツ先生の要請に応じて新明正道先生が社会学科に就任された。吉野作造門下で政治学を修めた新明先生には政治学に併せて、社会学も担当してもらうことになった。新明教授は大正10年から大正15年まで在職しこの期間に新明社会学の基礎づくりをされたが、大正15年に東北大学に転任された³⁾。

そこでその後任として九州大学の高田保馬先生の高弟である小松堅太郎先生が新明先生の推薦によって就任され、第二次大戦末期の昭和19年まで在任したが、民族研究所に移られたため、その後任として学院の高等商業学部の大道安次郎先生が社会学担当教授として法文学部へ移られた。

このように見ると、関西学院大学の社会学科は単にその創設の年代が古いというだけでなく、高田保馬、新明正道という大正から昭和にかけての日本の最もすぐれた理論社会学者の系譜をひいた由緒のある学科であり、しかも大道先生は高田、新明の双方の先生の教えを受けるといふ類稀な幸運に恵まれ、恩恵を受けた方であった。

関西学院における社会学の歩みを語る時、大道安次郎先生は一つの重要な焦点をなす方である。ここで先生の御人柄と業績について振り返ってみよう。

〔1〕 敦賀から関西学院へ

大道安次郎先生は明治36年5月1日福井県敦賀市相生町に生まれた。生家は代々「孫助」を名のる海産物問屋である。先生御自身の表現によると、中程度の問屋だそうである⁴⁾。

先生は海産物問屋の六男に生まれた。幼少の頃からひときわ英才の誉が高かったが、家が海産物問屋であったためか敦賀商業学校に進んだ。その頃から先生は学科の成績が抜群であるだけでなく、運動においてもすぐれた能力を持っておられた。ことに剣道とテニスが得意で、剣道部のキャプテンを務め、両方とも全国大会にも出場されたとのことであった。このように先生はいわゆる文武両道に秀いでた学生であったようである⁵⁾。

敦賀商業は貿易港という土地柄、語学を重視し、英語のほかにロシア語も教えたそうで、先生は「中学時代にはロシア語も習ったがすっかり忘れた」と語っておられた。

先生は壮年期には故郷敦賀のことをあまり語られなかったが、定年退職（昭和47年）された頃から、時々、敦賀に帰られるように成り、やがて敦賀の調査を始められ、遂にはその成果を書物にまとめるのだと情熱を傾け、亡くなられる半年前、『変貌する地方都市』を上梓された。魂の故郷回帰といえよう。

先生は大正12年4月関西学院の高等商業学部へ進学された。それには四つの契機があったと先生は語っている。その第一は敦賀商業の本科二年生の頃、関西学院出身の井上見先生（河辺満蹇先生と同期）に英語を教わったが、この先生が発音をやかましく教えられた。この先生を通して初めて英語に強い関西学院を知ったわけである。

次に先生は敦賀商業時代に教会にも通ったそうである。北陸への門戸であった敦賀は、当時、仏教王国であったが、にもかかわらず、キリスト教会もいくつか存在していた。すなわち組合系、メソジスト系および賀川豊彦のイエス友の会の教会があったが、先生はその頃、賀川豊彦の教会に通って若き魂のよりどころを求められたそうである。この経験が先生をミッション・スクールに向わしめたのではないかと思われる。

第三に先生はことの外、音楽を愛好された。その先生が関西学院の学生のコーラス“Old Kwansei”を聞いてこれに魅了されたが、これが、先生

2) 河上丈太郎「学院と私」『関西学院60年史』249-254頁。

3) 新明先生は関西学院で社会学を教えるように要請されたため初めて社会学を勉強し始めたが、やがてこれに専念するように成り、東北大学では社会学の講座担当者となった。

4) 「生き学びそして教える探究者の声——大道安次郎」『クレセント』18号 関西学院昭和60年6月 102頁。

5) 「生き学びそして教える探究者の声——大道安次郎」『クレセント』18号 関西学院昭和60年6月 102頁。

をして関西学院に向わしめた動機の一つであった。当時、関西学院では広報活動のため講演旅行が行なわれていたが、それに学生のグリークラブが同行して合唱を行なったわけであるが、その四部合唱のハーモニーの美しさに若い魂が魅了されたのであろう。先生は関学に入學後、グリークラブに属して活躍され、教師となられた後も永くグリークラブの顧問をしておられた。

第四はテニスが取り持つ縁である。先にふれたように、先生はテニスが得意であったが、神戸高商で開催された大会に出席した際、試合の前日、関西学院のテニスコートを借りて練習を行なった。その時のミッション・スクールらしい品格を備えた学院のキャンパスの印象が先生の心を捕え関西学院に向わしめたのである⁶⁾。

これらの事情をかえりみると、先生の場合には関西学院にたいする強いあこがれを持って入学されたものであることが理解される。

〔2〕 学生時代

次に先生の学生時代、すなわち関西学院高等商業学部と九州大学の学生時代の生活について簡単にふれてみよう。

(1) 関西学院高等商業学部

大道先生は大正12年4月、関西学院高等商業学部に入學した。当時の関西学院は「原田の森」（現在の神戸市灘区の王子公園付近）にあった。東側の山麓六甲台には神戸高等商業学校（現在の神戸大学）があり、両校は何かにつけてライバル意識をもやしていた。

大道先生のゼミの担当教授は後に西南学院に移られた中沢慶之助先生であった。中沢先生は一つ橋大学の御出身で、左右田喜一郎博士の指導を受けていたため、哲学や経済哲学の造詣が深く、大道先生も中沢先生の指導を受けてこの時期にカントの著作や新カント学派に親しんだようである。

この時期に大道先生のその後の運命を左右する重要な出来事が起っている。それは新明正道先生との出会であった。

新明先生は東京大学で吉野作造教授の指導を受け「新人会」のメンバーでもあったが、関西学院の第四代のベーツ院長の招聘を受けて大正10年に関西学院の文学部に就任された。新明先生は政治学の専攻であったが、社会学の専任が居ないので社会学も講義するように要請された。このことが契機となって新明先生は後に著名な社会学者となられたわけである⁷⁾。

さて大道先生が高商の二年生（大正13年）の時、新明先生が高商の「社会学」を担当された。これが大道先生にとって新明先生との最初の出会いであった。答案を読んだ新明先生は、直ちに学生大道安次郎の才能を見抜き、自宅に遊びに来るように勧めたので、新明先生宅にも出入りするようになった。その後、高商における新明先生の講義だけでなく、文学部の「社会学」も受講した。

この時期には新明先生からジンメルの形式社会学の外、フィアカントやフォン・ウィゼの学説を学んだが、同時にマッキーバーの「コミュニティ」についても教えられ、その翻訳をすすめられたという。後に大道先生は米国コロンビア大学のマッキーバーのもとに留学することに成る⁸⁾。

(2) 九州大学時代

昭和2年3月、高等商業学部を学校始まって以来の最優秀の成績で卒業した大道先生は九州大学の高田保馬先生のもとに入學した。というのは大道先生が高商の三年生の終わりに新明先生が東北大学へ移られたので、これを慕って新明先生のもとに進学することを考えたが、すでに新明先生のヨーロッパ留学が決まっていたため、先生の紹介状を持って九州大学の高田保馬先生のもとに入學することに成ったわけである。

大道先生はすでに高商時代に高田保馬博士の『社会学原理』（大正8年）、『社会学概論』（大正11年）、『社会関係の研究』（昭和元年）などの著作に目を通していたので高田先生のお名前は知っていたが、九州大学に入學して直接教えるを受けることに成ったわけである。

高田先生のもとで1年生の時にはデュルケームの『社会学的方法の基準』を、2年生の時にはテ

6) 「生き学びそして教える探究者の声——大道安次郎」『クレセント』18号 関西学院昭和60年6月 102頁。

7) 新明正道「日本社会学の展開」『関西学院大学社会学部紀要』第40号 昭和55年 14頁—15頁。

8) 「生き学びそして教える探究者の声——大道安次郎」『クレセント』18号 関西学院昭和60年6月 102頁。

ンニースの『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』をテキストにして演習がなされた。受講者は2～3人で研究発表はいつも大道先生が引受けさせられたとのことで、高田先生との文字通りマンツーマンの教育を受けられたわけである。大道先生は卒業論文にはジメルをテーマに選んでまとめたが、高田先生の勧めでマックス・ウェーバーやマックス・シェラーなどについても研讀を深めた。

九州大学時代には高田先生のもとで社会学を学ぶことの外に印象的な事柄がいくつかあったと回想されている。その一つは関西大学の岩崎卯一先生が来られて講義をされた際、その最終回にテンニースの学説を中心に「社会進展について」学生の討論会が開かれた。その際、マルクス主義の立場をとる多数の学生を向うにまわして大道先生が唯一人でこれに立向ったところ、岩崎先生から「君は弁護士になれ」とほめられ、その後長く目をかけていただいたそうである。

第二は九州大学に進んでから、関学の高商時代に学んだ哲学とは異質の「現象学」に触れたことである。二宮教授の哲学の演習でフッサールの『イデエン』を学び、ハイデッガーの著書にも目を通された。

第三は、社会学者以外に法律学の木村亀二先生および『日本資本主義発達史』の著者高橋亀吉先生に師事することが出来たことであった。木村先生とは東北大学への内地留学の際に再びお目にかかり、高橋先生とは学会で長くおつき合ひすることに成った⁹⁾。

さて大道先生が三年生になった頃、母校の関西学院高等商業学部長の神崎先生から、経済学を受講するように指示を受けたため、急拠、経済学も履習して昭和5年3月に九州大学を卒業した。

〔3〕 果された役割

(1) 高等商業学部教授(昭和5年～19年)

大道先生は九州大学卒業後、直ちに昭和5年4月から母校の関西学院高等商業学部の教壇に立つことに成ったが、それには次のようないきさつがあった。当時の高等商業学部長の神崎驥一先生は

かねて学院の出身者から教壇に立てる者を育成したいと考えていたが、東北大学へ去る新明先生に、そのような可能性のある学生はいないかと推薦を依頼したところ、新明先生は「大道君」ならと推薦されたそうである。要するに当時の学部長の神崎先生と新明先生および中沢先生などの配慮によって大道先生の母校への奉職は実現したものである。

ところで大道先生は九州大学では社会学を専攻したが、当時関西学院の文学部では新明正道先生の後任として高田保馬直系の小松堅太郎教授が社会学を担当されていたので、高等商業学部で採用されることに成った。九州大学の三年生に成って急に経済学を受講させられたのはこの為であった。

このように恵まれた事情で母校の教壇に立つことに成ってから、2～3年経ったころ「経済学史」の担当を要請された。そこで学史の講義の準備のため参考書に目を通してうちに堀経夫先生の業績に感銘し、当時、大阪商大に居られた堀先生を訪ね研究会に参加させてもらうことに成った。大道先生はイギリス経済学史を選びまずアダム・スミスから始めた。

堀先生の研究会に参加(昭和10年頃)してから2年位経った頃、大道先生は関西学院の内地留学をもらって東北大学の新明先生のもとで1年間研究生生活を送った。この頃、新明先生は「行為関連の立場」を体系化しつつあった時期で、これに強い影響を受けておられる。

新明先生は昭和6年ヨーロッパから帰国され、7年には『知識社会学の諸相』を出版された。さらに10年には『現代知識社会学論』を編集されているが、その第2章には大道先生が「デュルカイムの知識社会学論」を執筆されていることを見ても、大道先生もまた知識社会学に早くからコミットしていたことが知られる。

先生は東北大学での内地留学を終えると再び「堀研」に出席してスミス研究を続け、2年後の昭和15年には『スミス経済学の生成と発展』を公刊した。本書はこれまでのスミス研究に全く新しい光を当てた画期的な業績として学界において高く評価され、版を重ねた。この著書によって先生は高島善哉教授、大河内一男教授とならんでス

9)「生き学びそして教える探究者の声——大道安次郎」『クレセント』18号 関西学院 昭和60年6月 102頁。

ミス研究の三羽鳥とうたわれた。

この時期は先生の処女作が発表された時期であるが、同時にこの期の著書は先生の業績の中でも最も充実し精気に充ちたものである。

公刊された著書と訳書は、

- ① 『スミス経済学の生成と発展』日本評論社 昭和15年
- ② バジヨット『国民の起源』（訳）慶応書房 昭和17年（後に『自然科学と政治学』と改題して岩崎書店より出版）
『スミス経済学の系譜』もこの時期に完了していたが、出版出来なかった。

（2）法文学部・文学部時代（昭和19年～昭和35年）

第2次大戦の戦局が厳しさを増すにつれ、ミッション・スクールとしての関西学院は文部省の指示で学部学科の統廃合を余儀なくされ学生数も減少した上、米国・カナダのミッション・ボードからの支援も失ない正に存亡の危機に立たされた。この危機をのり切るため、当時の神崎院長は学院の存続のため懸命の努力を続けた。このような状況のなかで法文学部で教鞭をとっていた社会学担当の小松堅太郎教授が文部省の民族研究所に移られたので、もともと社会学の専攻者であった大道先生がその後を引継ぐため、高等商業学部から法文学部へ移られた。これは昭和19年10月のことであつた。しかし翌20年8月には戦争も終わり落着いて学問研究に専念出来るように成り次第に学生数も増えたので、昭和21年4月には法学部と文学部が分離し、大道先生は文学部教授となった。さらに昭和24年には新制大学が発足し、このころから社会学研究室も次第に整備されるように成つた。

関西学院はミッション・スクールであつたため、戦争中にもかかわらず「アメリカ文化研究所」が設けられ、かなりの文献が集められていたので、大道先生はスミス研究と併行して、アメリカ社会学の研究を始めていたが、その成果を戦後、昭和23年『アメリカ社会学の潮流』として公刊した。つづいて昭和25年9月から1年間アメリカのコロンビア大学のマッキーバー教授のもとに客員研究員として滞在しアメリカ社会学の研究に没頭した。なお昭和22年に公刊した『スミス経済学の系譜』に対して昭和26年早稲田大学から経済学博士号が

授与されている。

この間に社会学科の教授陣も次第に充実に向つた。昭和24年4月に高等学部から金沢実先生が専任講師に就任され、次いで25年4月には岸川八寿治先生が助教授に就任されて学科も充実したが、残念なことには金沢先生は昭和26年4月に神戸大学に移られ、岸川先生は病気のため29年に休職され、30年4月には退職された。そこでこれを補うものとして昭和29年4月、定平元四良助手が専任講師に昇格し、また余田博通先生が助教授に就任した。さらに30年10月には萬成博先生が専任講師となり、翌34年4月には領家穰先生も専任講師となられたので学科も次第に充実したものと成つた。

また専任助手には、まず大阪谷修三氏（昭和24年1月～25年10月）、次に定平元四良氏（昭和25年11月～29年3月）、その後、藤本丁卯治氏（昭和29年4月～33年3月）、つづいて倉田和四生（33年4月～35年3月）が任命されている。その中で大阪谷修三氏は高校教師に藤本丁卯治氏は松下電器に転出した。

このようにして社会学科の陣容が整つたので宝塚市を対象にした共同研究を実施するなど次第に研究成果が生み出されるように成つた。そこで文学部の機関誌『人文論究』の外に、社会学科の機関誌として昭和30年から『関西学院社会学』を創刊した。

これまでいくつかの側面から述べて来たように、社会学科にも次第にアカデミックな雰囲気が形成されて来たが、その中心にあつたのは学科主任の大道先生であつたことは言うまでもないことである。

この期間に公刊された著書は、

- ① 『スミス経済学の系譜』実業の日本社、昭和22年、
- ② 『アメリカ社会学の潮流』三一書房、昭和23年、
- ③ 『高田社会学』有斐閣、昭和28年、
- ④ 『アメリカ社会学の源流』弘文堂、昭和33年、
- ⑤ 『マッキーヴァー』有斐閣、昭和34年の五冊で、さらに翻訳として
- ① アダム・ファーガソン『市民社会史』白日書店、昭和23年（本書は昭和29年に河出文庫に収められた）

②スミス『国富論の草稿その他』創元社、昭和23年がある。

この16年間は最も充実した生産性の高い時期であった。

(3) 社会学部時代(昭和35~47年)

昭和30年代に入ると日本経済は高度成長の軌道にのりはじめ次第に活況を呈するようになったがこれに対応して大学も拡大発展期に入った。

小宮院長や玉林教授の談話によると、関西学院の70周年記念を機会に実質的な総合大学をつくり上げようという意見がもり上ったが、その為には自然科学系の学部を作ることが必要だということになり、最初は工学部を作る案が考えられたが、その前に文科系の学部を一つ作った上でということに成り「社会学部」に決まった¹⁰⁾。

社会学部が選ばれた理由は社会学に対する時代の要請ということもあったが、同時に、戦前の原田の森時代から文学部に社会学科が存在し、さらにその中では新聞研究もなされていたという実績があり、その伝統が戦後の文学部社会学科に受継がれていたということが重要な契機をなしている。

さらに昭和27年には竹内愛二教授を中心に社会事業学科も創設されていた。そこで文学部の社会学科と社会事業学科を母体にして、社会学、社会福祉、マス・コミ、産業社会学の四つのコースをもつ社会学部を発足させることに成った。

この間にあって大道先生は社会学科の主任として「新学部創設委員会」の委員として新しい学部づくりにたづさわった。社会学科(大道安次郎、余田博通、定平元四良、萬成博、領家穰、倉田和四生、牧正英)と社会事業学科(竹内愛二、杉原方、嶋田ツヤ子、グレーム)の教員の外に理論社会学の蔵内数太、小関藤一郎、新聞学の藤原恵、社会心理学の田中国夫、丹羽春喜、張光夫、西尾朗、栃原知雄、本岡五男(留学中 杉山貞夫、武田建)などを加えて発足した。

関西学院の社会学部は関西初の社会学部であり、関西大学、立命館大学、仏教大学などの社会学部のモデルとなった。

社会学科の主任教授であり、設立委員会のメンバーでもあった大道先生は初代の学部長に選ばれた。その為、新しい学部の伝統を作り出してい

く為の責任者としてずい分と苦勞も多かったことと思われる。そのなかで新しい学部の伝統を創るために先生が特に留意された事は学部のキリスト教にもとづく人格教育であった。学院出身でキリスト教的な人格教育の意義を重視していた先生はまず学部のモットーとして学部の玄関に「真理は汝等に自由を得させよ」を刻み、週二回の学部のチャペル・サービスには毎回出席された。これが伝統となって歴代学部長はチャペルに出席している。

第2はアカデミズムの高揚に心掛けたことである。大学であるからには業績が最も尊重されるべきだというのが先生の持論であり、研究業績をあげることに身をもって範を示された。

第3は、一般教育を重視し、広い視野を身につけさせること。学部段階では専門に限定せず、広い分野の一般教育課目や専門科目を出来るだけ多く履習させ、総合的な視野を身につけさせることを意図した。これが1学部1学科とした理由であった。

第4は、自由な気風の育成であった。文学部や経済学部などに比べて社会学部は新しい学部であるところから教授会にも自由な気風がみなぎり、若い助教授も気がねなく発言出来るような雰囲気を作られた。しかし新しい学部の運営にはずい分と苦勞されたようで、その為、胃潰瘍を患って度々入院されている。

学部長を2期4年間(昭和35年~39年)勤めて、ほぼ学部運営が軌道に乗ったところで任期を終えたが、続いて図書館長の職につき4年間在任した。このように先生は管理的業務は苦手だといいながら8年間も管理職についたことに成る。

学部教授としての担当科目は学部ではゼミナールの外に「社会学原論」と「都市社会学」を担当された。その後「社会学原論」は清水盛光教授が引継ぎ、「都市社会学」は筆者がひき継いだ。また大学院では「修士課程」と「博士課程」の両方において多くの学生を育てている。

昭和37年6月~9月には夏休みを利用して短期の外地留学に出発された。その際、ワシントンD.C.で開かれた「世界社会学会」に出席したあと、アメリカ・カナダおよびヨーロッパのニュータウ

10) 関西学院編『大学とは何か』昭和50年 394頁-395頁。

ンと広域都市計画を視察している。

先生は昭和38年頃から胃潰瘍や心筋梗塞のため度々入院されたが、このハンディをよく克服され再び著作活動に励まれた。

この期間（12年間）に出版された著書は、

- ①『老人社会学の展開』ミネルヴァ書房、昭和41年、
- ②『日本社会学の形成』ミネルヴァ書房、昭和43年、
- ③『周辺都市の研究』恒星社厚生閣、昭和47年の三冊で
翻訳として、
- ④パーク、バーゼス外の『都市』（筆者との共訳）鹿島出版、昭和47年 がある。

（4）定年退職とその後（昭和47年～62年）

大学卒業後の昭和5年4月以来、42年間母校に奉職された先生は昭和47年3月末に定年退職された。著作に専念することを念願されていた先生は退職を楽しみにされており、退職後は著作に専念したいので、二度の勤めは御免だと述べ、関西学院の社会学部の非常勤講師も辞退された。そして実際、著作に専念されたが、数年後に松山商科大学に数年間奉職することを余儀なくされた。それは松山商科大学に社会学科を新設するに当って大道先生に教授就任を懇請された為で、先生は固辞されたが是非ということで断わり切れず引受けざるを得なく成った。先生としては同時に松井茂樹氏を講師として採用してもらうことで同意したものであった。松山商科大学を退任した頃から庭の花作りにも精を出されバラやチューリップなどを丹精こめて作られた。しかし同時に著作活動も益々活発に続けられた。

そしてこの間に49年には ①『新明社会学』を公刊している。これは大道先生が生涯にわたって最も敬愛した新明正道先生の理論体系をまとめたものであるだけに深い愛情が行きとどいた配慮となつて現われている。

その5年後の54年には ②『老年の光と影』を出版、

続いて57年には ③『病院社会学の展開』、

さらに59年には ④『変貌する周辺都市』、

そして最後に61年には ⑤『変貌する地方都市』

を出版されたが、これは亡くなられる6ヶ月前のことであった。

このように先生は死に到るまで倦むことなく著作活動を続けられた。この15年間に5冊の著書を公刊している。先生の著作活動が退職後も衰えることなく、逆に盛んになっていることがわかる。

〔3〕 研究分野と業績

大道先生はきわめて幅広い研究活動をされた方であった。大雑把に整理してみても「経済学史」、「アメリカ社会学（史）」、「日本社会学史」、「高齢者・病院の研究」、「都市研究」の五つの分野にわたっている。以下これらの分野毎にその業績についてみてみよう。

（1）スミス研究

先生はまずイギリス経済学史、わけでもアダム・スミスの研究者として華々しく学会にデビューされた。先生がスミス研究に入られた契機は先にも少しふれたが、次のようないきさつがあった。先生は昭和5年3月九州大学を卒業後直ちに4月から母校関西学院の高等商業学部の講師に就任された。ところが数年後、先生に「経済学史」を担当するように要請された。そこで講義の準備のため、参考書に目を通してのうちに堀経夫先生の研究業績に強い感銘を受けたので、早速、当時の大阪商大に堀先生を訪ね、堀先生の研究会に参加することに成った。研究会のメンバー中にフランス経済学史の岡本博之氏とドイツ経済学史の三谷友吉氏が居たので、大道先生は「イギリス経済学史」を選び、まずアダム・スミスから始めることに成った。これが昭和10年ごろのことであった¹¹⁾。研究会は毎週開かれ、大道先生は月1回スミス経済学について研究発表を行い、堀先生の懇切丁寧な指導を受けた。

ところで大道先生は九州大学卒業後も東北大学の新明先生と連絡を密にしその影響を受けていた。新明先生はヨーロッパで当時隆盛であった知識社会学を研究して昭和6年5月に帰国されたが、昭和7年には留学の成果を『知識社会学の諸相』として出版された。さらに昭和10年には『現代知識社会学論』を編集して公刊されたが、その第2章

11) 『経済学の研究と教育の50年』（堀 経夫博士喜寿記念事業委員会編）昭和48年 572頁 743頁。

「デュルカイムの知識社会学」は大道先生が執筆している。このことから明らかなように大道先生は新明先生の影響を受けながら知識社会学的思考法——視座構造を修得していたことがわかる。

「堀研」に入って研究しはじめてから2年ぐらいい経った昭和12年から13年にかけて先生は東北大学の¹²⁾新明先生のもとに内地留学をしておられる。この時期には新明先生はヨーロッパの社会学の研究のみでなく「新明社会学」——行為関連の立場、総合社会学——の構築に取かかられた時期であり大道先生もその影響を強く受けて帰った。

東北大学から帰ると再び「堀研」に通ってスミス研究を続けたが、その成果が昭和15年の『スミス経済学の生成と発展』である。この著書はスミス研究にこれまでとは異なった新しい光を当てて新機軸を開いた画期的な研究として高く評価された。先生はこの書物によって高島善哉、大河内一男両教授とならんで戦前のスミス研究の三羽鳥と称されるようになったが、高島善哉教授の『経済社会学の根本問題—経済社会学者としてのスミスとリスト』よりも1年早く、大河内一男教授の『スミスとリスト—経済倫理と経済理論』より3年も前に出版されている。

先生はスミス研究を三部作にまとめる計画を立てた。第1部は「スミス自身に即して」彼の経済思想が『国富論』にまで到達した経過をたどったもので、これが『スミス経済学の生成と発展』である。次に第2部は生成過程の地盤と思想的背景とを系譜的にたどったもので、『スミス経済学の系譜』(昭和22年)であり、第3部は『国富論』が欧米や日本などの経済学にどのような影響を与えたかを探ることを目指したものであったが、この第3部は未完に終わっている。さらに著書の外にこれに関連する3冊の翻訳を完成している。

- 1) バジヨット『国民の起源』昭和17年、慶応書房
- 2) ファガソン『市民社会史』昭和23年、白日書店
- 3) スミス『国富論の草稿その他』昭和23年、創元社

1) 『スミス経済学の生成と発展』

まず『スミス経済学の生成と発展』は三部作の

なかで「専らスミス自身に即して」彼の内部に於て経済思想が如何に生成し発展したかを探るという角度から研究されたものである。

第1章では道德哲学の根本精神を明らかにすると同時に、経済学がどのような位置を占めているか、第2章では道德哲学が経済的企図にどのように作用しているか、第3章では経済学の体系に道德哲学がどのように浸透しているか、第4章では専ら経済学の領域において、資料——「エジンバラ講義」、「グラスゴー講義」、「国富論の草稿」——にもとづいて経済思想の生成・発展をあとづけている。最後に第5章ではこれらの考察を通してそこに見られる発展の傾向を「道德哲学より経済学へ」、「断片的より体系的へ」、「消費論的体系より生産論的体系へ」、「政策中心より理論中心へ」、「道德哲学より経済学へ」の五つに概括して特徴づけている。

本書は①歴大な資料のなかから適切なものを選び出す直観的能力、②ギリシャ哲学から道德哲学へ、さらに経済学への発展のあとづけ、③発展に見られる特徴づけの見事さ等において独創的な成果であるといえよう。

この著書は先生の処女作であるが、スミス研究の中でも最も迫力に満ち、獨創性に富んだ業績として高く評価されている。

2) 『スミス経済学の系譜』

次に戦後に惜まれて逝った「三木清」に捧げられている『スミス経済学の系譜』は「スミス経済学の生成過程をその地盤と思想的背景とに結びつけて系譜的に考察する」¹²⁾ことを目指した。

本書は大きく前編と後編に分かれている。前編の第1章ではスミスの道德哲学体系を全体として問題にしその系譜と地盤とを明らかにした。次に第2章では道德哲学体系の第1部門である自然神学の系譜をたどり、第3章ではその第2部門である倫理学の系譜を明らかにし、第4章では第3部門である法学の系譜を尋ねた。これは前著の1・2・3章に対応している。第5章では道德哲学から経済学が独立し、スミスが道德哲学者から経済学者へ変身していくプロセスを辿り、経済学思想の発展の諸方向を系譜と地盤とに結びつけて考察している。

12) 大道安次郎『スミス経済学の系譜』実業之日本社 昭和22年 序1頁。

後編ではスミス経済学の根本的性格の究明とその系譜ならびに地盤の究明につとめている。後編の第1章では「経済人の誕生」、第2章「個人主義の論理」、第3章「見えざる手の形而上学」、第4章「自然的自由の制度」、第5章「スミス経済学の国民性」となっている。この中で考察の焦点を専ら系譜と地盤の探究におき、そのなかから「スミス特有の社会理論」を摘出し、「国民主義者スミス」を描き出したところにこの著作の特色がみられる。

本書の研究手法にはより明確に知識社会学的な方法が用いられている点が注目される特色である。

本書を脱稿したのは昭和19年の春であったが戦争が激しく成って出版出来ず、戦後、22年になってようやく出版された。戦争末期、空襲が激しさを増すなかで、焼失をおそれ、デュープリケートを作って一部は自宅に、一部は神学部の地下室に保存していたそうである¹³⁾。

本書は後に早稲田大学の久保田明光先生のもとに学位請求論文として提出され経済学博士の称号(昭和26年7月)が与えられた。

これらの著書の外にこれに関連して3冊の翻訳を行なっているが、これらはいずれも重要な古典とされているものばかりである。したがって昭和15年から23年までの8年間に著書2冊、翻訳3冊の計5冊も出版されている。この期間にいかに精力的な研究がなされたかがうかがわれる。しかもこれらの研究はいずれも経済学史に残るすぐれた業績である。

筆者は大道先生の研究業績のなかでもスミス研究こそ最もすぐれた成果だと考えている。ただ惜しむらくは最初に構想された3部作のうちの第3部(スミス研究の国際的影響)が未完に終わったことである。

先生は昭和61年11月、最後の論文を『社会学部紀要53号』に発表された。それは「学説史研究の方法」と題するものであるが、これは先生が生涯を通じて追求した学説史の研究を総括するような論文であった。これをみると、先生の研究は学説史の研究に始まって学説史に終わったと言えるのではあるまいか。

(2) アメリカ社会学(史)

1) 『アメリカ社会学の潮流』

新明先生が東北大学に移られた後、文学部で社会学を担当されていた小松堅太郎博士は戦争が激しく成った昭和19年、文部省の民族研究所に移られたので、もともと社会学専攻である大道先生が高等商業学部から文学部へ移られ、社会学を担当することに成った。

その頃関西学院には「アメリカ文化研究所」が設けられアメリカ社会学の文献もかなり集められていたので、スミス研究と平行しながら「アメリカ社会学」の研究も進められていた。その研究成果が昭和23年に『アメリカ社会学の潮流』(三一書房)として出版されている。

このなかで先生は戦前においては日本の社会学は主にヨーロッパ、ことにドイツ社会学に心酔し多くを学んで来たが、これからはアメリカ社会学に学ばなければならないと考えるが、その為にはアメリカ社会学そのものを充分理解しておく必要があると主張している。そこでアメリカ社会学の正体、特質、その現実的地盤と背景を究明するためにこの書をまとめられている¹⁴⁾。

本書の中では、まず第1章でアメリカ社会学の過去として、ウォード、サムナー、ギデングス、スモールの社会学の特質について論じ、第2章は「アメリカ社会の現在(一)」として、アメリカ社会学の潮流をとりあげ、「心理学的社会学派」、「文化社会学派」、「社会調査学派」を取扱い、第3章は「アメリカ社会学の現在(二)」として学問分野別にみて、「理論社会学」、「都市社会学」、「農村社会学」、「教育社会学、児童・家族社会学」、「社会病理学、社会事業、応用社会学」、「社会変動論と人口・人種研究」、「研究機関」について検討した。次に第4章ではアメリカ社会学の特性として「国境性」、第5章では「国際性」をとりあげている。そして最後に補論として「アメリカ社会学における社会力概念」について論じている。

既存の研究としては早瀬利雄の『現代社会学批判』(昭和9年)、難波紋吉の『米国文化社会学研究』(昭和14年)等しかなく、戦中・戦後の文献のとぼしい時代において、スミス研究と平行しな

13) 「生き学びそして教える探究者の声——大道安次郎」『クレセント』18号 関西学院昭和60年6月 102頁。

14) 大道安次郎『アメリカ社会学の潮流』三一書房 昭和23年 18—19頁。

から比較的短期間に広汎な領域の学史的発展についてこれだけのすぐれた研究をなし遂げたことは、まことに驚嘆すべきことといわなければならない。

2) 『アメリカ社会学の源流』

先生は早くからアメリカ留学を志し、昭和23年に申請したが実現せず、24年も延期に成った。内外協力会の留学に応募され留学者試験には合格したものの、「教会の在籍会員でないとの理由」¹⁵⁾で不採用に成ったが、神崎院長らの儘力でコロンビア大学からビジテング・スカラーとして受入れる許可をもらい、翌昭和25年秋から1ケ年間、コロンビア大学に留学した。この間、マッキーヴァーについて毎週1回の個人指導を受けながらアメリカ社会学を研究し、資料の蒐集に努めた。

その成果は翌年の27年ごろから発表され、6年後の昭和33年『アメリカ社会学の源流』として弘文堂から出版されたが、これを一読された関西大学の岩崎卯一教授が「博士論文に値する立派なものだ」とほめられたので、東北大学の新明先生のもとに学位請求論文として提出し、昭和36年3月文学博士の学位を受けた¹⁶⁾。

本書ではまず第1章でアメリカ社会学を「二つの大陸の子供である」という角度からみて、コントとスペンサーに焦点を合せている。第2章はアメリカ社会学の前史として「コントのアメリカ流入過程(その一)」、第3章は同じく「コントのアメリカ流入過程(その三)―南部の場合―」、第4章は「コントのアメリカ流入過程(その三)―アメリカ社会科学運動―」、第5章は「コントのアメリカ流入(その四)―北部の場合・間接流入―」を、第6章は「コントからスペンサーへ」、第7章は1883年におけるコントとスペンサー、第8章は「その後のコントとスペンサー」、最後に補論として「アメリカ社会学会の成立をめぐる」について論じている。

この研究はコントとスペンサーの社会学がアメリカ社会学の成立に際して与えた影響を詳細に追跡したものであるが、①コントとスペンサーのアメリカ流入を時期別、地域別(南部・北部)、継承した学者別に検討する課題設定の巧みさ、②時

期区分の適切さ、③スペンサーの受容が先でコントの受入が遅れたとする通説の否定、④南部の社会学―ホームズの再評価などの点からみて大道先生の独創性がうかがわれる。岩崎卯一教授が称讃されたように、他の追隨を許さぬすぐれた業績であるといえよう。

3) 『マッキーヴァー』

先生のアメリカ研究の中でもう一つの重要な焦点はマッキーヴァー研究である。先にふれたように先生は25年10月から26年夏までマッキーヴァーのもとに留学された。高等商業学部の学生時代から関心を持ちつづけていた学究の元で個人指導を受けその偉大さに触れた。有斐閣の求めに応じて出版した「人と業績シリーズ6」の『マッキーヴァー』(昭和34年)は小著(小判の約90頁)ではあるが、先生のマッキーヴァーへの熱い想いが伝わって来るようで、馬場先生が指摘しているように珠玉の小編といえよう¹⁷⁾。

本書の構成はⅠ 伝記、Ⅱ 学者マッキーヴァー、Ⅲ 社会思想家としてのマッキーヴァー、Ⅳ 人間マッキーヴァーとなっており、マッキーヴァーをトータルに捉えようとしている。この手法はスミス研究において大道先生が創り出した独特の研究方法でありマッキーヴァー研究においても立派に成功している。

(3) 日本社会学史

先生の業績のなかで日本社会学史の研究としてはまず『日本社会学の形成』(昭和43年)があげられるが、広い意味では『高田社会学』(昭和28年)と『新明社会学』(昭和49年)もこれに含めることが出来るであろう。そこでこれら3冊についてみてみたい。

1) 『高田社会学』

先生が『高田社会学』を出版された年はたまたま高田先生の古稀の祝いに当たっていたのでそのお祝いに捧げた形になっている。それは筆者が学部三年生の頃であったが、研究室にも学生の間にも大道先生がかもし出すアカデミズムの高揚した雰囲気は充満していたことを思い出す。

本書は高田保馬先生の社会学の理論体系をまと

15) 昭和25年6月8日、22日理事会記録および昭和24年8月11日常務理事会記録。

16) 「生き学び教える探究者の声―大道安次郎」『クレセント』関西学院 昭和60年6月 18号 105頁。

17) 馬場明男「故大道安次郎博士を偲ぶ―彼の生涯と業績」10頁。

めたものであるが、まず序論で「高田社会学の学界的意義」、第1章では「高田社会学の方法論」、第2章は「社会本質論」、第3章は「高田社会学の体系」、第4章は「高田社会学の独創（一）」、第5章は「高田社会学の独創（二）」、第6章は「マルキシズムの批判者としての高田博士」、第7章は「高田社会学の性格」が取扱われ、最後に「生涯と著作」が付されている。

本書は膨大な量にのぼる高田社会学論のなかから最も重要な問題——方法論、本質論、体系性、獨創性、対マルキシズム、性格——を選んで論じたもので、高田社会学のポイントを平易に説いた入門書となっている。高田先生に直接教えを受け、その全容を知りつくした人にしか書けない著書であるといえよう。

2) 『新明社会学』

次に『新明社会学』について検討してみよう。先にふれたように大道先生が最初に社会学の手解きを受けたのは新明先生の講義であった。事実、大道先生にとって新明先生は心の故郷であり、学問の故郷であったから、その敬愛の情ははた目にも尋常ならぬものに映った。その新明先生に対して『新明社会学』を捧げたのは大道先生が関西学院を定年退職された2年後の昭和49年のことであった。

本書は序論と3部9章に付録として略歴と著作目録がつけられている。

序論では「新明社会学の特質」が明らかにされ、第1部では1章から3章にわたって、新明社会学の生成と展開が跡づけられている。第2部では「周辺との距離」という形式で他の理論家と比較しながら新明理論の特質をさぐっている。その中の4章では「総合社会学からの距離」と題して①マルクス主義、②コント、③ジンメル、④高田社会学、⑤尾高邦雄、⑥松本潤一郎との違いについて検討し新明理論の特質を述べている。さらに第5章では「行為関連の立場からの距離」として①和辻哲郎、②マックス・ウェーバー、③パーソンズとの相違について述べることによって他の理論と比較しながら新明理論の特質を浮彫りにしている。第3部は「学説研究家としての新明博士」として第6章では社会学史の叙述が戦前と戦後でど

のように違うか、第7章では学説研究として書名毎に①オーギュト・コント、②ゲマインシャフト、③国民革命の社会学、④ファシズムの社会観、⑤知識社会学の諸相、⑥社会学的機能主義、⑦社会学における行為理論、⑧社会学の発端 をとりあげて概論している。

第4章では「特殊問題研究」として、第8章で「民族・人種論」、第9章で「イデオロギー論」を扱っている。

このようにして新明先生の膨大な業績を適切に整理し基礎理論と個別研究の両面についてその特質を明らかにした。これもまた新明理論の生成発展の経緯を知りつくしている大道先生にしてはじめて書ける新明論といえよう。

3) 『日本社会学の形成』

先生はアメリカ社会学史の研究と平行して日本の社会学史にも強い関心を持ち研究をすすめていた。定平元四良教授は大道先生の助手を勤めていた頃から研究テーマは明治社会思想史であり、その研究対象の中には社会学者も含まれていたが、定平教授の研究にもいろいろな示唆をされていた。また昭和30年ごろから大学院においても日本社会学の黎明期の社会学者、西周、津田真道その他について演習の形で研究を行っていた。これらの研究をさらに進めてまとめたのが、明治100年に当る年に出版された『日本社会学の形成』(昭和43年)である。このような形式でまとめられる直接のきっかけと成ったのは西周の生誕地を訪ねた紀行文風の「日本社会学のプロメイトイスの生誕地を訪う」を日本大学の『社会学論叢』に掲載したことであった。そしてその後も続いて訪問記を同誌に発表した¹⁸⁾が、本書はこれらの論文をもとにまとめられたものである。

本書には帆足万里から高田保馬にいたるまでの日本社会学の形成に貢献した9人の学者を取上げ、ふるさと訪問と生涯・業績にふれた上で各人にとって最も重要と考えられる問題の一つづつ取上げて論じている。それは各社会学者の理論体系が形成された社会的背景を問う一種の知識社会的な研究といえよう¹⁸⁾。

取上げたテーマとしては1) 帆足万里では『窮理通』の意義、2) 西周では「西周の回心と転

18) 大道安次郎『日本社会学の形成』ミネルヴァ書房 昭和43年 17頁。

向」, 3) 加藤弘之では「キリスト教排撃をめぐって」, 4) 外山正一では「日本の衣裳をつけたスベンセリアン」, 5) 建部遯吾では「建部社会学の偉容」, 6) 遠藤隆吉では「遠藤社会学の功績」, 7) 米田庄太郎では「未完の壮大な社会学体系」, 8) 戸田貞三では「家族論」, 9) 高田保馬では「勢力論」である。

この研究はふるさと訪問記と各人一つづつ重要テーマを取上げるとい形式上のユニークさだけでなく、問題の本質を捉える鋭い直観力とすぐれた分析能力を示した異色の著作だといえよう。

(4) 老人・病院の社会学的研究

1) 『老人社会学の展開』

大道先生は天与の豊かな才能を備え、すばらしい直感をもっておられた。新明正道先生も昭和10年の『現代知識社会学論』の序言で「大道氏は九大法文学部の出身であるが、フランス的な直感に秀いで、文化の全面的な把握を目指している新進の学徒であり」¹⁹⁾と紹介されている。このような先生の持つすどい感覚によって時代の問題をいち早く捉えたのが老人問題であった。早くも昭和20年代の終わり頃から、静かな第2の「人口革命」すなわち高齢化に強い関心を抱いておられた。その契機となったのはL. リントンの論文「社会構造における見逃された側面」(1940)と深沢七郎の『楡山節考』(昭和31年)であったという。高齢化の問題が一般に意識され始めたのは昭和50年代であったから、20年以上も前からこの問題を鋭く捉えていたことに成る。

昭和30年には『人文論究』に「老人の社会的地位」を発表しているが、昭和35年から39年まで新設された社会学部の学部長を勤められ、心労のため療養入院されたりした為、先生にしては予定より時間がかかり、昭和41年ようやく『老人社会学の展開』が公刊された。

この著書は老人を捉えるに当って、①個人としての老人、②老人を受けとめる社会との関係、③全体社会との関係、の三つの視座を設けて研究している。

第1章は「老人社会学への招待」と題して人口

高齢化とその波紋を説いている。第2章は「老人の社会的概念」を規定している。第3章は老人と職場集団の関係として「定年制」を扱い、第4章では高齢化に伴うパーソナリティの変化を考察した「老人パーソナリティ」、第5章は家族集団との関係を見る「家族における老人の座」、第6章は近隣集団、地域社会、任意集団との関係を扱った「老人と社会集団参加」、第7章は「新しい余暇階級」としての老人、第8章は「日本の老人の余暇の問題」の特質の究明、第9章は都市化現象と高齢化をみた「都市化する老人」、最後の第10章は「老人の社会的役割」を論じている。

この時期までには高齢化の社会学的研究としては、那須宗一教授の『老人世代論』(芦書房(昭和37年))と笠原正成教授の『老人社会学』(昭和37年)が出版されていたにすぎず、先生自身も全く五里霧中のなかでまとめたと言われているが²⁰⁾、個人、集団、全体社会の視点をしっかりと据え、すぐれた社会学的分析を展開しているところから暫新たな試みとして注目され、『朝日ジャーナル』の書評にも取上げられ版を重ねた。先生のもつ鋭い時代感覚とすぐれた分析手法が結晶した著作といえよう。

2) 『老年の光と影』

その後、12年ほど経てミネルバ書房の杉田社長の依頼で執筆したのが『老年の光と影』(54年)である。社長は専門家を対象とするものでなく、一般読者を対象とするものであるから読み易いものを要請したそうである²¹⁾。本書の中で大道先生は、①まず老年にはよい面(光)と悪い面(影)があること、②そこで光の面に注目する、③死生観にもとづく三つの行動類型、④老人の生き方を平凡人の立場で、ということ根幹としながらまとめている。

第1章では「老年の光と影」と題して、老人の二つの側面について述べ、第2章では「老人の社会的役割」として指導者としての老人の役割(光)と老害(影)について、第3章では「老人の特権——余暇」と題して余暇のための余暇を光として描いている。第4章では「人間における生

19) 新明正道編『現代知識社会学論』巖松堂 昭和10年 4頁。

20) 「生き学び教える探究者の声——大道安次郎」『クレセント』関西学院 昭和60年6月 18号 105頁。

21) 大道安次郎『老年の光と影』ミネルヴァ書房 昭和54年 225頁。

と死」と題して死生観にもとづいて三つの行動類型——未来志向型（純粋型）、現在志向型（享楽型・逸脱型）、平凡型に分けて論じている。最後の第5章では三つの行動類型でみた老人の生き方について述べている。

『老人社会学の展開』を出版したのは先生が63才の時であったから、研究に取りかかったのは50才のころであった。したがってそれは壮年の立場から老人を研究したものといえる。しかし『老年の光と影』を書いた時はすでに75才を超え、老年も後期にさしかかった時期である。自から老境にあって老年を自由にそして縦横に論じているところから先生らしさの良く出た好著であるといえよう。

3) 『病院社会学の展開』

先生は昭和38年ごろから胃潰瘍で何度か入院療養され、定年退職後には胃潰瘍の手術もなされた。ところが先生は入院中も病院に書物や原稿用紙を持ち込み研究に没頭しておられた。再び健康になられた先生はしばらくすると「この経験を生かして病院社会学を書くのだ」と言われていたが、これを実現されたのである。

本書をまとめるに当たって念頭に置かれたことは、①研究対象を日本の病院に限定した、②病院を役割の統合体と考えその構造機能分析を試みる、③社会の中の病院を研究するため国際社会、日本社会、地域社会の三つのレベルを用意した。

本書は2部、10章から成っている。1部は「病院の構造機能分析」を扱っているが、その中で、1章は勤務医の役割、2章は看護婦の役割、3章は入院患者の役割、4章は三者の関係、5章は院長の役割を分析している。

第2部は「社会のなかの病院」であるが、6章は「世界のなかの日本」、7章は「日本医療の月光的性格の限界」、8章は「医師の自由開業制の投げかける問題」、9章は「地域医療の多様性」、10章は「地域保健医療の体系化」を分析している。

アメリカでは医療社会学は学会でも一部会を構成し研究も盛んであるが、日本では未発達分野で、理論的・体系的な分析は少ない。五里霧中の

なかですすめた研究でこれだけの役割分析がなされたということは高く評価されよう。

(5) 都市の社会学的研究

スミス研究ですぐれた業績を残された先生は第二次大戦の終わる頃から法文学部に移られるとともに研究の重点もアメリカ社会学に移された。そしてアメリカ社会学史、日本社会学史、老人社会学の研究等でいずれも第一級の業績を残されたが、昭和30年代から亡くなるまでの間先生が最も精力を注がれたのは都市研究の分野であったといえよう。昭和35年に社会学部が創設された時以来、先生の担当課目は「都市社会学」であった。²²⁾

先生をして都市研究に向わしめた契機の一つは昭和25年から1年間、アメリカのコロンビア大学のマッキーヴァーのもとに留学されたことにある。先生は出発前すでに『アメリカ社会学の潮流』を出版しアメリカン・サイエンスとしての社会学の何たるかを理解していたが、現地での体験はまた格別であった。講議の外に週一回一対一の特別指導を受けたが、その予習の為の勉強は尿に血が混る程であったと述懐されていた。この留学を通して先生は実証的研究の重要性を感得し、実証主義者となられた。

第2の契機は昭和27～8年ごろから、大道先生を中心に社会学研究室のメンバーが協力して宝塚市の総合調査を始めたことである。この調査はずっと後の『周辺都市』の研究につながるものであるが、いずれにしても、これが本格的な都市研究にふみ込む重要な契機となった。²³⁾

第3に日本都市学会への参加である。留学から帰学して2年後の昭和28年に日本都市学会の設立に参加し、昭和31年の近畿都市学会の設立にも重要な役割を果たした。さらにこの年には近畿都市学会のメンバーが共同で実施した「高知市総合調査」に参加し、社会班を担当したが、それに続く布施市、牧方市の総合調査にも参加された。

第4に、昭和35年にワイズマン団長を迎えて日米共同の「阪神都市圏計画調査」に藤岡謙二郎、柏井象雄、吉富重夫、米花稔、米谷栄二、毛利正光等の諸先生方と共に日本側委員として参加した

22) 昭和40年頃、先生が入院された為、筆者が代行することに成り、そのまま今日に到っている。

23) これについては「宝塚市の総合調査についての覚書」『都市問題』45巻6号 東京市政調査会（昭和29年）および「宝塚市の総合調査についてのまえがき」関西学院社会学第一輯 昭和31年がある。

が、この経験が大道先生を都市研究に傾倒させる決定的な契機となった。

最後に、東京で茅誠司さんを理事長に「日本地域開発センター」(昭和39年)が設立された際に磯村英一教授のすすめで理事となり各種の調査に参加したことも都市研究に入る重要な契機となった。またこの頃から都市問題の専門雑誌『都市問題』(東京都)および『都市問題研究』(大阪市)にも時折、寄稿するようになった。

これらの契機を生かして先生は都市研究に入られたが、やがて先生独自の都市研究をすすめるようになった。

1) 『周辺都市の研究』

その第一は定年退職の年に出刊された『周辺都市の研究』(47年)である。この研究は先にもふれた「宝塚市の総合調査」以来すすめて来た研究を基礎に、地元住民の利点を最大限に生かし、内側から参与観察的に研究を行なったところに特徴があるといえよう。この著書には宝塚市の「生活時間のリズム」、「消費構造」、「福祉地図」、「都市の品格」などが含まれており、大道先生ならではのユニークな視点からの分析がみられる。

2) 『変貌する周辺都市』

次に先生は『周辺都市』の「あとがき」で本書をリンド夫妻の『ミドルタウン』を意識しながら書いたと述べているが、さらにリンド夫妻の『変化するミドルタウン』にならって『変貌する周辺都市』(共著)昭和59年を出版された。これは周辺都市宝塚市のその後10年間の変容過程を検証したものであるが、この著書には、第2章「住宅地形成とその変遷」、第3章「宝塚市とコミュニティの形成」、第4章「団地生活の変貌」、第8章「地域老人福祉の見直しと模索——地域的システム化の必要性」など興味ある分析がなされている。

3) 『変貌する地方都市』

先生は敦賀市の御出身であったが、定年になられた頃から、時折、故郷に帰られるように成り、やがて敦賀市の研究を始められ、さらにこれをまとめて学会や専門誌に発表され、亡くなる半年前の昭和61年6月25日、『変貌する地方都市』として出版された。この著書も地元民の利点を生かし、先生ならではのユニークな視角をもって分

昭和62					
61					編者1 『都市問題研究』
60					編者1 『都市問題研究』
59					
58					
57					編者1 『都市問題研究』
56					
55					
54					
53					
52					
51					
50					
49					編者1 『都市問題研究』
48					編者1 『都市問題研究』
47					編者1 『都市問題研究』
46					
45					
44					
43					
42					
41					編者1 『都市問題研究』
40					
39					
38					
37					
36					
35					
34					
33					
32					
31					
30					
29					
28					
27					編者1 『都市問題研究』
26					
25					
24					
23					
22					
21					
20					
19					
18					
17					
16					
15					
14					
13					
12					
11					
10					
昭和					
62					

析がなされている。ことに都市の「生活リズム」、「福祉の地域的システム化」、「品格論」など興味深い研究が含まれている。

最後に都市研究に関連しているパーク、パーゼス等の『都市』(1925年、翻訳1972年)の翻訳が

ある。アメリカ社会学に造詣の深い先生はシカゴ学派の重要性をかねがね強調し、パークやバーゼスの研究もされていたので、筆者がパークの『都市』を協同で翻訳したいという提案を快よく受けられ、前半を先生、後半を筆者が担当し、約1ヶ年をかけて訳した。これもいまは一つのなつかしい思い出となってしまった。

(6) 要約

以上の五つの分野にわたる先生の研究方法とその業績の特徴を次のように要約することが出来る。

まず第一に、先生はゆたかな天与の才能——すぐれた直感を持っておられ、これによって問題の核心をいち早くつかみ、その研究をいくつかの論文にまとめ、それを集めて著書として出版された。そのよい例として普通の人より20年も前に高齢化の重要性を洞察し『老人社会学の展開』を出版されたことである。

「研究成果はためらうことなく論文にし、いくつつかまてめて著書として公刊せよ」というのが先生の実践された教えであった。

第二に、あらゆる機会をうまく把え、これを題材として見事に分析して論文にまとめ、著書として出版された。先生にとっては現実存在のすべてが研究対象であり、興味のつきない対象であった。そのよい例は『病院社会学の展開』である。普通、病院生活はいやなもので一日も早く退院することを望み、思い出すのもおぞましいと考えるところであるが、先生の場合には逆に入院中に病院こそ格好の研究対象であると思いついて研究をすすめ、その成果を著書として出版された。独自のセンスと実践能力というべきであろう。

第三に、先生はよく自分は半分遊びながら仕事をするのだと言はれ、テニスやゴルフなどの外基や将棋なども楽しまれ、悠々と余裕のあるところを見せていたが、その反面、寸暇を惜んで研究に打込まれる「仕事の鬼」であった。そして一つの仕事が終わる前に次の企画を立てて次々と進められ、著書の出版を第一の生きがいとする学者らしい学者であった。

第4に、ある特定のテーマだけに固執せずそのテーマについての研究にある見通しをつけると、次のテーマを発見してこれに集中し、それにも見通しをつけると、次に移るといった具合に研究の対象自体が「生成発展」している。先生はよく「おれは問題の核心をつかむのは早いのだがある程度やると次のテーマを見つけてそれに移るくせがあるのだ」と言って笑われていた。実際、スミス研究においては三部作を企画しながら二部で終わっているし、アメリカ社会学史の研究においても『アメリカ社会学の源流』はアメリカ社会学研究のごく一部にすぎないもので、さらに研究をすすめると書いているが、その後、この分野での成果は発表されていない。スミス経済学と同様に先生の研究自体も「生成発展」している。しかし移られた次の分野でも第一級の業績を残された点が常人に比べてすぐれていたと言えよう。

第5に、五つの分野のすべてにおいて第1級のすぐれた業績を残されたが、他と比較すると、最も才能を発揮されたのはスミス研究、アメリカ社会学史、日本社会学史など「学史的な分野」であったと筆者は考えている。

第6に、先生の業績のなかで発想、分析法として一貫してみられるものは「知識社会学的分析手法」——形成された理論の社会的背景をさぐる——である。これは最初のスミス研究において成功を収めたが、その後の研究においてもこの手法が色濃く残されており、その成果が光っている。マンハイムの知識社会学は新明先生の影響を受けながら、大道先生が最初に取組んで身につけた社会学であった。²⁴⁾

第7に、先生は理論を駆使した「個別研究」に才能を発揮された方で、独自の理論体系を構築しなかった。高田社会学と新明社会学に通暁し15冊に及ぶ著書を出版しながら、独自の『理論社会学』は遂に書かれなかった。しかしそのような意図がなかったわけではない。先生は高田博士の追想録の中で「続いてこの四、五年の間に都市社会学についての新たな二・三の書物をまとめ、そのあとで私なりの理論や体系の構築にゆっくりと取組

24) 筆者は卒業論文に「カール・マンハイムの知識社会学」をまとめた。当時は先生がマンハイムに強くコミットしていることを全く知らなかったが、先生が「君の論文は新明先生の著作を基本にしているね」とにっこりされたことを思い出す。

みたいと計画している」²⁵⁾と述べている。²⁶⁾ いづれにしても念願の『大道社会学』も未完に終わってしまった。

〔5〕 お人柄——出会った人々との交わり

(1) 恩師への敬愛

先生は生来、温和で明るく社交的な方で、人から好感を持たれるお人柄であった。先生は大正12年4月に関西学院高等商業学部に入學され、当時、文学部に於て教鞭をとっておられた新明正道先生の「社会学」の講義に出席して先生を知ることになったが、その美しい師弟関係は終生変わることなく続いた。九州大学法文学部を卒業された大道先生は新明正道先生の推挙がもとで昭和5年母校関西学院高等商業学部の教壇に立つことに成り、やがて経済学史を担当することとなったが、社会学の研究も続け、昭和10年には新明先生の編集で出版された『現代知識社会学論』の第2章「デュルカイムの知識社会学」を執筆しているが、さらに昭和12年ごろには東北大学の新明先生のもとで内地留学として1年間勉強されている。先生のアダム・スミス研究は知識社会学的であると御自身で述べておられるが、これは新明先生との関係で培われたものである。

大道先生の新明先生に対する敬愛の念は側から見ていても実に美しいものであった。亡くなられる数日前にも「最も親しい人を一人選ぶとしたらやはり新明先生だ」と言われたのを筆者は印象深く聞いた。その想いが形と成ったのが『新明社会学』であった。

次に高田保馬先生に対する尊敬の念も一方ならぬものがあつた。大道先生は九州大学に入學するに当って、郷里の佐賀県三ヶ月村に高田先生を訪ねたことがあつたが、後に、郷里に高田先生の歌碑を立てる企画にも先頭に立って努力された。

高田先生が亡くなられる二ヶ月前(昭和46年12月)弟子や知人数人が高田先生を見舞って順次病

床の先生の手を握つたが、たまたま大道先生が握つた時、高田先生が「勉強、勉強」とつぶやかれたそうである。後で大道先生はこのことを「高田先生が不勉強な自分のことを心にかけて叱咤激励したのだ」²⁷⁾と謙虚に受け止めて自戒されていたが、筆者は高田先生は「大道君もよくやっているが、もっと勉強して大いに仕事をしなさい」と言われたのであろうと思っている。大道先生はその期待によく応えられた。

高田先生のために歌碑建立のほか、記念論文集や追想集の刊行にも献身的に働かれたが、いち早く心をこめて『高田社会学』を捧げている。真の意味において先生は恩師を大事にされた方であつた。

大道先生にとってマッキーヴァー教授も尊敬おくあたわざる、かけがえのない恩師であつた。すでに高商時代に新明先生のすすめでマッキーヴァーの研究に着手(翻訳をすすめられたが実現しなかつた)しているが、後、昭和25年9月から1年間、念願のマッキーヴァー教授のもとに留学して個人指導を受けている。最初、言葉が通じないので困つたことをなつかしく回想しておられた。この留学体験は先生を実証主義的な社会学者に変身させる重要な契機となつた。大道先生はマッキーヴァーに対しても有斐閣から『マッキーヴァー』を捧げている。

スミス経済学研究では堀経夫先生の教えを受けた。当時、大阪商科大学に居られた堀先生を訪ねて研究会に入れてもらい、そこで月1回研究発表を行なつて堀先生から懇切丁寧な指導を受けた。その研究成果が画期的な業績となり経済学史学界の寵児となつたのであるから堀先生の学恩に感謝するのはある意味で当然のことといえよう。後に堀先生は関西学院に移られたので、さらに親しい関係を続けられた。昭和35年に社会学部を創設した時の学長は堀先生であつた。大道先生は堀先生にも深く尊敬の念を抱き学恩に報いられた。このことは堀先生の環曆記念論文集や古稀記念論文集の刊行などについても編集委員として献身されて

25) 高田保馬博士追想録刊行会『高田保馬博士の生涯と学説』創文社 昭和56年 222頁。

26) 亡くなられる数日前、いろいろ話込んで帰ろうとした時、「おれの研究活動もあと10年ぐらいのものだ」ともらされた。私はまだ10年も頑張るつもりかと内心大いに驚いたが、都市社会学も2冊書き終えたので、これから「大道社会学」を書き始めるつもりであつたのかも知れない。

27) 高田保馬博士追想録刊行会『高田保馬博士の生涯と学説』創文社 昭和56年 259頁。

いることによって明らかである。

大道先生は口ぐせのように「自分ほどよき師に恵まれた者はいない」と言われていたが、その恩師を敬愛し、その期待に応える形で自からを高めていった生涯であったといえよう。²⁸⁾

(2) 学界における交友関係

温和で明るく社交的であった先生は人から好感を持たれ、多くの友人との親しい交わりを持っておられた。このことは先生の退職記念論文集『経済と社会』の寄稿者の幅広さに現われている。この論文集には 1). 経済学史関係では堀経夫、久保芳和、杉原四郎、越村信三郎、小松芳橋、大河内一男、2). 社会学関係では、阿閉吉男、蔵内数太、臼井二尚、早瀬利雄、馬場明男、森東吾、池田義祐、井森陸平、内藤莞爾、3). 都市・人口関係では、館稔、小古間隆蔵、近江哲男、磯村英一、中沢誠一郎、関清秀、富田富士雄、大橋薫、4). 老人研究関係では那須宗一、小山隆、塚本哲、笠原正成、米山桂三が論稿を寄せている。先生はこれらの人達を含む多くの方々との温かい交友を終生持ち続けた。

ことにアメリカ社会学研究の関係で長い間の交友関係を持った早瀬利雄教授と馬場明男教授との親しいつき合いはつとによく知られていた。このことは大道先生の告別式(昭和62年1月15日 関西学院社会学部において)に御高齢にもかかわらずわざわざ東京から参列された馬場先生が友人代表として読まれた切切たる弔辞のなかに表われていたが、さらに馬場先生は三月にはいち早く「大道安次郎博士を偲ぶ——彼の生涯と業績」を印刷された。その文章には馬場先生の大道先生への熱い思いが美しく結晶している。

先生の学会活動は広くきわめて活発であった。日本社会学会は戦前からのメンバーとして理事も勤められ、八十路を越えてもなを学会にも欠かさず出席された。関西社会学会においても長老の一人としてつとめて出席されていた。

さらに先生は東北社会学会および西日本社会学会にもしばしば出席(時々発表もされた)して両学会の発展に貢献された。このことは告別式に両学会からも「献花」をいただいたことによって証明

されている。

日本都市学会はチャーター・メンバーであり理事を勤め、近畿都市学会は創立そのものに参加された。また日本社会学史学会は創立発起人の一人であり理事を務めた。

その他老人学会においても理事など重要な役割を果たした。

このようにして、告別式には「日本社会学会」、「関西社会学会」、「日本都市社会学会・西日本社会学会」、「日本社会学史学会」、「日本都市学会」、「近畿都市学会」、「経済学史学会」、「老年社会科学会」、「社会分析学会」の10学会から献花をいただいた。

(3) 奥様への愛情

先生の人柄を知るためには先生の奥様に対する深い愛情について述べなければならない。先生は若いころから奥様に対しても極めて理解が深く、いたずらに家の中に閉じこもることなく自由に活動することを奨め、深い愛情を示された。奥様は若い頃から声学を学び、日本歌曲を得意とされたが、先生は奥様のこのような趣味活動をむしろ奨励されており、昭和30年ごろの横浜市立大学で開催された日本社会学会大会ではアトラクションとして講堂で大道夫人が日本歌曲を独唱されたこともあった。

お二人の間には子供がなかったこともあって、とても美しい夫婦愛がみられた。奥様は二度も軽い脳梗塞の発作で入院されたが、これをリハビリによって治された。その間にあって先生は日常生活の不自由さをいとわず、懸命の努力で奥様を助け病気を克服された。

この度は奥様と一緒に先生も入院し、いつも側にいて奥様をやさしくいたわり介護する生活を二ヶ月余りも続けられた。これはなかなか普通の人には出来ることではないであろう。

先生はわれわれに夫婦愛の手本を示されたように思われる。

(4) 学生へのいつくしみ

大道先生は九州大学を昭和5年に卒業してすぐ母校関西学院の高等商業学部の講師として教鞭をとられてから昭和47年に定年退職されるまで42年

28) あまりにもすぐれた師をもつことは逆に重荷でもあったのであろう。ある時、先生は筆者に向かって君も「出藍の誉れ」という言葉を知っているだろう。あまりに偉い師を持つことはつらいことだよ、と笑われたことがあった。

間の長い間、研究活動とともに教育活動に従事された。先生の講義はノートや教科書などを使って丁寧に理論体系を論述するというタイプではなく、要点を取上げて大まかに述べあとは学生の自発的な研究を期待するといったタイプの講義が多く、また脱線することも多かった。「大学生であるから教授から細部にわたって教わるのではなく、自分で勉強すべきだ」という態度をとっていたように思われる。しかしそこには大道先生の講義らしいまろやかさがあり温かさがあった。

ゼミナールの指導も同様で、細かな指導はあまりなさらず、大まかなアドバイスをするとどめ、専ら自発的な学習意欲を高めることをねらった指導をされた。そして意欲のある学生をよく先生の自宅に呼んで御馳走されたりした。

先生は「かけ出しの頃は学生に教えるというよりも、一緒によく遊んだものだ」と当時をなつかしそうに述懐されていたが、その頃（高商時代）の学生との温かい交流は最後まで続いていた。毎年正月には当時の学生（和田幸三さん外数名）をお呼びして交歓会を持っていた。

その後の文学部、社会学部時代の学生の中にも筆者を含めて、かなりの数の学生が、先生の自宅にお邪魔してお世話に成っている。

また先生は頼まれると気軽に結婚の仲人を引受けられたので、その数も相当の数に上っている。

大学院におけるゼミ生の指導も学部生同様に細かく指導するかわりに、大まかな方向を示し、温かくその成果を見守るといった方針をとられたし、弟子の就職についてもよく面倒を見たので、学生はいずれも先生を深く敬愛していた。

大学院の大道ゼミに属した人のなかで研究職についた者としては、定平元四良（関西学院）、倉田和四生（関西学院）、牧正英（関西学院）、宇賀博（神戸学院大学）、竹内安子（大谷大学）、国蔵真臣（鳥取大学）、松井茂樹（松山商科大学）などがおり、いずれも大道先生の衣鉢をうけついでそれぞれの分野で活躍している。

先生の温かい心は自分のゼミ生だけでなく、関西学院の全学生に向けられていた。学院出身でもあるところから、一時期、先生は学生のクラブの部長を二つ（スキークラブとテニスクラブ）も引

受けていた。ところが昭和23年に1教師1部長制が施行されることになったので、選択を迫られたが、先生としてはどちらも可愛い為めに甲乙つけ難いので両方とも辞退することにしたと語っている。先生らしいエピソードである。²⁹⁾

(5) その他の社会的活動

研究と教育活動以外で先生がなさった活動のなかで地方自治体との関係について述べておこう。

さきにふれたように先生は和昭25年、マッキーヴァーのもとで実証的研究、調査重視のアメリカ社会学に触れ一つの回心を体験した。そこで帰国後、昭和28年には日本都市学会の設立時のメンバーとなり、31年には近畿都市学会の設立にも参加された。

ところがこの年、近畿都市学会のメンバーが共同で「高知市総合調査」を実施したが、大道先生は社会班を担当しその責任者となった。これが地方自治体とのかかわりの最初であった。その後、この種の総合調査は布施市、枚方市、泉佐野市などでも行なわれ、先生もこれに参加されたが、これが各市の総合基本計画の資料となっている。

その後、昭和43年ごろから数年間、阪神広域行政都市協議会の依頼で行なった阪神間6市1町の総合調査にも参加された。

また先にもふれたが東京の「日本地域開発センター」が設立された際、磯村英一教授の推薦で理事となり、各種の調査研究に参加された。

さらに地元の宝塚市との関係も深くなり、市の各種の委員となって活躍した。ことに都市計画委員会の委員長も長く勤めている。これらのことが先生の『周辺都市』や『変貌する周辺都市』に生かされている。

(6) 叙勲推薦の辞退

大道先生のお人柄をしのぶ上で見逃せない出来事は先生が叙勲の推薦を辞退されたことであろう。研究一筋に生きてきた先生は俗事には無欲で超然としたところがあった。

昭和47年に定年退職されてから数年後に関西学院では大道先生を叙勲の候補者として推薦することに決め、推薦文の作成を筆者に要請して来た。そこで筆者は先生の学恩に報いる好機と考え、精魂をこめて作業に従事した。その途上で先生が勲

章はいらないと言われているらしいということを伝え聞いたが、筆者はそれは多分、先生の本心ではなく、勧めたら受けるであろうと判断して作業を続け、ようやく完成したのでそれを先生に届けたところ先生は「学者にとってすぐれた業績（著書）こそが勲章であって、それ以外のものはいらぬ」と筆者を諄々とさとされた。先生にとって「世の富、ほまれは塵にぞひとしき」ものであったろうか。この時ほど大道先生が立派な学者に思えたことはなかった。論文作成や著書の出版については極めて熱心であったが、俗事のある面には淡々として無欲な先生であった。

むすび

大道先生は研究者に恵まれた天与の才能を備えておられた上に、新明正道先生と高田保馬先生という第一流の学者に直接教えを受けるという稀有の幸運に恵まれ、その期待通りに多くの分野にすぐれた業績を残された。

研究のスタートはスミス経済学であり、この分

野ですぐれた業績を残されたが、その分析手法は知識社会的なものであるべきものであった。

その後研究の対象はアメリカ社会学史、日本社会学史、老人・病院社会学、都市社会学へと生成発展した。そしてそこでいずれも第一級の業績を残され、その分野のパイオニアとなられたが、先生が最も得意とされ、特異な能力を発揮されたのは「学史的な研究」であったと筆者は考えている。

先生は明るく心の温かい社交的な方であったので、恩師に可愛がられ、多くの学友との親交に恵まれ、数多くの学生に敬慕されるお人柄であった。

このような恵まれた条件と状況の中で研究一筋に生きた先生の生涯は、人間味あふれた学究らしい見事な生きざまをわれわれに示している。

付記

急に思い立ち、大急ぎでまとめたため、多くの思い違いや間違いがあるのではないかと恐れている。お気づきの方に教えていただければ幸せである。